

# せたかむい

平電古  
成話平  
24町役場総務課  
21年12月18日

## 年表で読む 古平の歴史

134

### アイヌの 伝承と記録 ②

#### 1. アイヌとの争い

(北海道の歴史について書かれた『新北海道史』第七巻の資料) この記録によつて、先月号では

北海道の歴史については、松前家のことを知ることが必要だか、『新羅之記録』(しんらのきろく)といわれる、現在では最も古い文書が残つている。その中に書かれていることとして、「そもそも昔はこの国、上二十一日程、下二十日程、松前から東は駿川(むかわ=鶴川町)、西は興依地(よいち=余市町)まで人間が住んでいた」とある。

#### ◆コシヤマインの戦い

コシヤマインやシャクシャインの戦いのことについて述べた。しかし、これらの争いについてはいろいろな見方があるが、まずはその記録から当時の状況を記してみることにする。

この戦いの時には、生き残つた人たちの多くは松前や天河(現在の上の国町)の辺りに集まり住んだといわれ、天河から余市までは当時交通路があつたので、この頃から古平のアイヌの人たちに混じつて、和人も住み着いたのではないかとも考えられる。

この戦いが、道南地方に館(たて=小規模な城)を構えていた武士たちの勝利に終つたことから、ひとまず平穀な時が過ぎた。

が、それから一四〇年余りも過ぎた頃、またまたさうに広い地域でのアイヌとの戦いが起きた。おおかしくないような状況であつた。志濃里(しおり)というのは現在の函館市志海苔町付近であるが、当時、本州方面との交易で大変繁昌していたところで、昭和四十年代、大きな幾つかのかめの中から、三十数万枚という多量の古錢が見つかっている。このことからも、多くの商人たちが盛んに往来していたものと思われる。

この戦いの時には、生き残つた人々の多くは松前や天河(現在の上の国町)の辺りに集まり住んだといわれ、天河から余市までは当時交通路があつたので、この頃から古平のアイヌの人たちに混じつて、和人も住み着いたのではないかとも考えられる。

先のコシヤマインの戦いの後、東は白糠、西は増毛に至るアイヌが一齊に立ち上がり、次々と和人やその商船を襲つた。松前藩が置かれていたがまだ藩の力も弱く、松前藩では重大事件として江戸幕府に報告した。江戸幕府も成立してからまだ六年あまりしか経っていないことから、幕府にとつても蝦夷地で大事件が発生したわけである。そこで、東北の諸藩に対しても出

◆シャクシャインの戦い

寛文九年(一六六九)、染退(シブチャリ=静内)の惣乙名シャクシャインが、多くのアイヌに呼びかけて戦いを起した。そもそもその事の起こりは、シブチャリ(現在の静狩町)地方のアイヌの首長シャクシャインと、ハエ、またはハエクル(現在の門別町)地方のアイヌの首長オニビシとの間の漁場や獵場をめぐる争いからであつた。

シャクシャインの檄に応じて、東は白糠、西は増毛に至るアイヌが一齊に立ち上がり、次々と和人やその商船を襲つた。

先のコシヤマインの戦いの後、松前藩が置かれていたがまだ藩の力も弱く、松前藩では重大事件として江戸幕府に報告した。江戸幕府も成立してからまだ六年あまりしか経っていないことから、幕府にとつても蝦夷地で大事件が発生したわけである。

陣準備の指令が出された。

この戦いで、総指揮をとつた幕府の松前八左衛門が幕府に報告した『蝦夷蜂起』によると、

一、西蝦夷地にて百二十人相果

申候 (百二十人が死亡)

右の内 八十人 他国者

三十八人 松前者

内侍三人

外二人他国者 五人松前者

右の七人は助かり松前へ帰った  
一、船十一艘と西蝦夷地で荷物、  
和人が乱暴された

などとあり、また次のように書かれている。

一、西蝦夷地にて相果申候人数

二百七十三人

一、西蝦夷地にて助かり申候

二十六人

一、東西蝦夷地にて打ち破り申

候 船数

十九艘

一、東西蝦夷地へ参り候船の内

三十一艘は蜂起の噂を聞き、

途中より無事に罷り帰り候

この戦いが起きると、松前藩から応援を求められた津軽藩では藩士を派遣した。後にその報告を取りまとめた『津軽一統志』

### 3. 戦いの結末

永年の漁場・獵場をめぐって、

指導者を失つたことからアイ

一、おたすつ (歌葉) 二人

一、いそや (磯谷) 二十人

一、與市 (余市) 四十三人

一、ましけ (増毛) 二十三人

一、ふるひり (古平) 十八人

(ふるひり=ふるひらの誤記) 二十三人

このほかこの周辺で殺された人

数は百十三人とある。

先の『津軽一統志』には「松

前の図」として、海岸の書き入

れに次のようにあるが、襲われて犠牲になつた船なのか、当時

各地に派遣されていた船とその

乗組員なのは分からぬ。こ

の書き入れには「古平」と現在

と同じ漢字で書かれている。

地名の下の名前は、その地域

の場所請負人の名前である。

この背景には和人との交易の

不平等や、ぎりぎりの生活に追

い込まれたアイヌの不満があり、

戦いへの呼びかけに応じて一斉

に立ち上がつたのである。

戦いの形勢は、当初は人数も

多く意気の盛んなアイヌ側が優

勢と思われたが、弓矢と鉄砲の

争いでは次第に松前藩側に有利

な情勢になり、松前藩の提案によつてシャクシャインと和睦を

結ぶことになつた。ところが、

その宴会の席でシャクシャインを始めリーダー格を殺害し、本拠地のチャシを焼き討ちしてしまつた。

地域の首長でもあつたシャクシヤインとオニビシとの争いが発端であつたが、一方のオニビシが殺害されると、その残党は松前藩に応援を頼んだ。松前藩はほかのアイヌとの紛争をおそれて拒否したが、その使者が帰りにホウソウで死ぬという事態が起きた。これを松前藩の陰謀による毒殺だという風評が伝わり、にわかにアイヌの間に不安と動搖が広がつた。

この背景には和人との交易の不平等や、ぎりぎりの生活に追

い込まれたアイヌの不満があり、

戦いへの呼びかけに応じて一斉に立ち上がり始めたのである。

戦いの形勢は、当初は人数も

多く意気の盛んなアイヌ側が優

勢と思われたが、弓矢と鉄砲の

争いでは次第に松前藩側に有利

な情勢になり、松前藩の提案によつてシャクシャインと和睦を

結ぶことになつた。ところが、

その宴会の席でシャクシャインを始めリーダー格を殺害し、本

拠地のチャシを焼き討ちしてしまつた。

※『シャクシャインまつり』民

衆の戦いに蜂起し、松前藩に謀殺

されたアイヌの勇将シャクシャ

インとその一族の靈を慰める供

養祭で、昭和四四年、没後三〇〇

年を期して、地元アイヌの発起に

より顕彰会を設立し、日高支庁静

内町で、命日とされる九月二三日

に、全道からのアイヌの人たちが

集まつて行われる例祭である。

昭和四五年にはシャクシャイ

ンの像が建てられ、このまつりは、

アイヌ民族の古式床しい純粹な

伝統文化として、高い評価を受け

→ アイヌの英雄として称えられ

れているシャクシャインの像



続く

昭和四年  
続く

▼一月一四日(大吹雪)

三月以来病床にあつたとのこと。肺を患い昨年  
近年、古平では血氣の若者が肺で  
亡くなるのが多く困る。實に恐ろ  
しい病氣だ。私は九時頃弔いに行  
く。しばらく話しあ香典帖や死亡通  
知、その他いろいろ帳場の手伝い  
をし、四時頃に一度帰り、六時頃  
また行く。名月がこうこうと輝き  
良夜。お経を済ませて帰つたのは  
十一時。妻はこの夜、金沢老人の  
通夜に行く。

起床七時 店は割りと閑散だ。  
漁夫も来ないので町は静かなよう  
だ。八時頃、本陣の沢の石井さん  
の三男退助さん、十九歳で亡くな  
つたと通知がある。師範学校三年  
まで入り、優等を得たというのに

二月五日(吹雪)

終つて十時帰る。ランプの明りで  
あつたが、電灯からみれば随分と  
暗いものだ。夏の若葉の頃は石井  
さんのところはよいが、火防上か  
らも冬は不便である。

起床七時半、今日は随分寒さき  
びしくこの頃では一番のようだ。  
吹雪が激しいので板戸を閉め、一

二月一七日(晴)

を歩いている。蓮美さん病気全快したとて紅白の餅を頂く。「うして全快すればめでたいことだ。人木、舟の兄きなじはナカナカ重態のこと。久はこの頃はおもちやを持つて遊ぶようになつた。十時頃から吹雪もだんだん静かになつた。明日は天氣となるだろう。

# 当時の世相を見る 吉川源子作さんのおとから

⟨142⟩

いる。寒さもきびしい、熊さんけ  
石井さんへ手伝いに行く。私は港  
町の大谷老婆の葬式送りに行く。  
今日は金沢、住谷と葬式が三軒も  
ある。悦三と四郎はこの吹雪に、  
近くスキー大会があるとかで遊び  
に行き、昼になつても帰らぬ。男  
の子はナカナカ元気だ。晩に石井  
さんの通夜、四時に出かける。寒  
に寂しい。禪学会員十名で読経、

枚だけ開けている。石井さんの葬式十時なので九時に出かける。吹雪がはげしく寒い、外套に帽子をかぶつて目ばかり出して行つたが、手も顔も痛いような寒さであった。十時出棺、吹雪でナカナカゆるくない。寺の本堂に座つたら足が病めるようだ。十一時石井さんへ戻り昼食、のち家に帰る。由兄貴、病気が悪いとのことで見舞いに行

一月二六日 天吹雪

先日来からの寒さと吹雪もよう

やく恢復して、今日は寒さもゆる  
みしばらくぶりで海も上ナギ、漁  
船は皆出た。熊さんは月末の集金  
に出かける。寒暖計も二十度Fま  
では随分寒さもこたえるが、三十  
六度F(一・二度C)ぐらいにな  
れば楽だ。軒から珍しく雨だれが  
落ちている。午後一時から火防巡  
回に出る。新聞では上砂川小学校  
が昨朝焼失、三十万円の損害との  
こと。梅津さんと私は学校へ行き、  
各教室を巡回してストーブ、煙突  
などを見廻った。火災は実に恐ろ  
しい。

二月八日(快晴)

風邪の気で遅く起きる。店は漁夫たちが来たのでボツボツ忙しくなる。中 かあさん、四十九日で妻がお寺参りに行く。午前中は天気であつたが午後からは急に吹雪になつた。よく荒れる」とだ。十店員が来て網を注文する。幸治から手紙が来る。一月末で授業は終り七日卒業式まで休み、高商受験は十九日だから、その間ひとまず帰宅するかと思うときた。

▼三月一日（晴後吹雪）

回に出る。新聞では上砂川小学校が朝焼失、三十万円の損害とのこと。梅津さんと私は学校へ行き、各教室を巡回してストーブ、煙突などを見廻つた。火災は寒に恐ろしい。

かかる。寒いといつても三月に入れば楽だ。一月一日のあの厳寒からみれば凌ぎ易い。七時半帰る。町は漁夫が入り込み賑やかになつた。風邪の気味で早く休む。

▼三月一日(晴)

やく恢復して、今日は寒さもある  
みしばらくぶりで海も上ナギ、漁  
船は皆出た。熊さんは月末の集金  
に出かける。寒暖計も三十度下ま  
色になつたようだ。午後一時禅源  
寺へお参りし、二時帰る。今新谷  
店員から、網一千間、現金で七円  
五十銭で買うことにする。

▼三月四日（雪）

起床七時半、四日間ほど風邪気味でラブテラしていたが、今日は気分もよく店の事務をとる。本年の大雪は老人も記憶がないという札幌や小樽辺りでも甚だしいとのこと。熊さんと万太さんは、今日も店の前の雪引きをやる。なかなかの大雪だ。明日一日でだいたい終ることのこと。今年は雪の始末で百円からかかっている。八木良治さん、四時頃の船で遺骨になつて帰ることで、妻は浜まで出迎

せりとて通知があり、妻は弔いに行く。氣の毒なことだ。港町の姉トクちゃんを連れて札幌へ受験に行っていたが、今日帰つたとのことでどうか合格してくれるといい。小樽へ行つた梅野、虫、西館さんでは合格したとのこと。

頃には着くように手配せねばならぬ。店は一日中忙しかつた。一時途切れた沢江連の副業のスケソ漁が昨日から大漁、本日も一把に二百尾もかかつたとて人気が引き立つ。これから大漁が続くだろう。

一尾一錢のこと。夜、八木さんの通夜に行く。説教では、亡くなつた良治さんは大変な孝行息子であつたことが話された。兄弟たちは涙を流していた。十時頃帰る。

午前中、港町の姉が来て、トクちゃんを連れて受験に行つた時の苦労を話された。合格してほしいも

▼三月五日（雪）

えに行く。夜、八木さんへお参りに行き、十時頃帰る。静かなよいナギの夜だ。明日は小樽から船が来るかも知れぬ。建綱、その他の用具が早く来るのを待つてゐる。

▼三月五日（雪）

起床八時、熊さんは朝、円筒掃除をやる。掃除も一ヶ月ももたない。八木さんへ手伝いに行く。今日はボタボタ雪が切れ間なく降る。海は上ナギ、勇丸、共栄丸もようやく来て、名、新谷、田からのは網類十七個が届いた。明年からは、漁夫が来る前の二月二十日頃には着くよう手配せねばならぬ。店は一日中忙しかつた。一時途切れた沢江連の副業のスケソ漁が昨日から大漁、本日も一把握に二百尾もかかつたとて人気が引き立つ。これから大漁が続くだらう。

一尾一錢のこと。夜、八木さんの通夜に行く。説教では、亡くなつた良治さんは大変な孝行息子であつたことが話された。兄弟たちは涙を流していた。十時頃帰る。午前中、港町の姉が来て、トクちゃんを連れて受験に行つた時の苦労を話された。合格してほしいも

のだ。

### ▼三月六日（吹雪）

昨夜までは静かであつた天気が、今朝六時頃になつて俄然大吹雪、一寸先も見えぬほどであつたが、八時頃からだんだんよくなつた。熊さんは人木さんの手伝い、妻は葬式送りにいく。私は店番だがなかなか忙しかつた。建網の用具もあちこちに出た。この頃は各中学校の卒業式やら受験発表などが新聞に出る。夜、帳簿調べをし、七時半頃困へ行き、火防組合の四年度予算編成につきいろいろ協議し、十時帰る。今日の樽新に、試験場からの練習予想が出ていた。中漁で六十万石ぐらゐとのこと。的中するや否や、参考に切り抜いておく。

▼三月七日（雪）

起床七時半、今は建網建て込みの準備期間でナカナカ忙しい。熊さんと妻は六時頃から起きて朝の支度をしている。一日中電話や店の客で、熊さんと二人で目の廻るよう忙しさだ。女中がいないのでしようがない。本年は刺網やそ

の付属品などの客が少ない。これも昨年の不漁のせいだ。三月に入り彼岸も近くなるというのに、消えるどころかこの四、五日の雪で一寸先も見えぬほどであつたが、八時頃からだんだんよくなつた。熊さんは人木さんの手伝い、妻は葬式送りにいく。私は店番だがなかなか忙しかつた。建網の用具もあちこちに出た。この頃は各中学校の卒業式やら受験発表などが新聞に出る。夜、帳簿調べをし、七時半頃困へ行き、火防組合の四年度予算編成につきいろいろ協議し、十時帰る。今日の樽新に、試験場からの練習予想が出ていた。中漁で六十万石ぐらゐとのこと。的中するや否や、参考に切り抜いておく。

▼三月八日（春景色）

起床七時半、この頃は練場支度で店が忙しく、朝七時頃から電話やら客が来て忙しい。女中がいいないのでなおさらだ。朝のうちに空り空であったが、午後からは珍しく青空になり、太陽が輝き春景色になつた。冬ごもりから急に練場同行することにした。幸い上ナギ連れて通信所の受験に行く日だ。港町の姉も札幌へ行くというので同行することにした。幸い上ナギ連れて通信所の受験に行く日だ。だ、八時半出帆の富丸に乗り込む。どこを見ても四方の山はまだ真白く冬の景色だ。それでも余市近くでヤンサヨイサの掛け声で二半船は七円五十銭、吉治のは七円で綿のセルを買つた。夕食を済まして

△などへ行く。熊さんはアバ網を出しに板倉へ行き、入船町へ網を届けるやうらしい。午後二時から店はだんだんひまになつた。午後四時ころ幸治がひよっこり帰つて来た。九日に帰ると言つておったのに、思いがけなく早く帰つてき来た。幸治は五力年間の勉強が報は実際誰も経験がないという。子供の世話から店の用事で一日中心が落ち着かぬ。九時頃、ようやく事務も終えて子供らも休み、コタツに入つて新聞を見る。ヒツソリ幸治は五力年間精勤したので賞状貰えるだろう。十時頃になり、雪が降り板戸がバタバタしている。よく荒れる年だ。

▼三月九日（快晴）

起床七時半、この頃は練場支度で店が忙しく、朝七時頃から電話やら客が来て忙しい。女中がいいのでなおさらだ。朝のうちに空り空り空であったが、午後からは珍しく青空になり、太陽が輝き春景色になつた。冬ごもりから急に練場同行することにした。幸い上ナギ連れて通信所の受験に行く日だ。港町の姉も札幌へ行くというので同行することにした。幸い上ナギ連れて通信所の受験に行く日だ。だ、八時半出帆の富丸に乗り込む。どこを見ても四方の山はまだ真白く冬の景色だ。それでも余市近くでヤンサヨイサの掛け声で二半船は七円五十銭、吉治のは七円で綿のセルを買つた。夕食を済まして

たので姉も元気だ。プラプラ歩き十時半停車場着。ゆっくり休み十一時三十分発の汽車に乗る、十二時半小樽着。待合所でソバを食べながら三人で四十銭とは安いものだ。小樽はいつ来ても賑やかだ。ちょうど岡崎主人、奥さんも居られ話をしたが、吉治が退屈しているのを聞いて、吉治と坂下寮へ行けば、吉治は文治や寮の友達らと活動で港へ行つて見る。岡崎で夕食を食つて、吉治が帰つて来る。吉治は文治や寮の友達らと活動写真を見に行く。私は主人といふこと。夜、アルバムを見たが立派なものでよい記念だ。明日は吉治を連れて小樽へ受験に行くつもりだ。静かな夜、海もナギだらう。

▼三月一〇日（快晴）

起床七時半、幸い好天氣、朝食をとして吉治、文治らと三人で町へ出かける。(3) 鎌田では、閉店につき商品の投売りをやつているので寄つて見る。セーターその他でも正札の半額以上も安い。かれこれ見定めて買う。のち各森川へ行き商用を済ます。三時頃下宿に帰り、後また二人で山田町へ行き、

文治と吉治の服を買う。文治の服は七円五十銭、吉治のは七円で綿のセルを買つた。夕食を済まして

から吹雪になつてきたが、緑町の鈴木さんへ行き、幸治のことについてお話を述べ、のち学校の様子などいろいろ聞く。十一時頃まで話しほつたのは十一時半、吹雪が強くなる。

### ▼三月一一日 (快晴)

起床七時、吹雪も止んでよい天気になった。今日は吉治、遅信講習所受験の日なので、早速支度し八時半小樽局に着いた。ボツボツ受験生も集まり、九時半頃には七十名がになつた。番号札を渡され、小樽俱楽部に集まる。十時から試験が始まり算術の科目だつた。中学生のような人もいた。私は商用で十小林に行く。昼食を駆走になり、帰途古本屋に寄り雑誌などを買う。古本は安いものだ。先に宿に帰り、文治と不要なものや土産物などをコウリに詰めたりしていたが、吉治が帰つて来ないので迎えに行く。途中で会つたが、道に迷つたとのこと。ちょうどよかつた。夜食の後知らせがあり、岡崎へ行く。姉も来ていろいろと話し、湯に入つて、その日は岡崎の二階に泊まつた。

### ▼三月一二日 (快晴)

昨夜は二時近くまで奥さんや姉と話して階に休んだが、吉治の試験があるので七時に洗面、早々に坂下寮へ行く。吉治に支度させ、小樽俱楽部へ行く。今日は作文とほか一科目だ、終つて③鎌田の投売りを見るべく行く。開店が遅かつたようだが混雜している。のち下宿に帰つて昼食をし、④へ行く。品物は豊富でいろいろと準備もしている。土産物などを買つているうちに、打ち合わせしていつた吉治が來たので、二人であちこち見て廻り、食堂でお汁粉などを食べる。吉治は何かにと珍しがつている。五時頃帰る。岡崎から電話があり行つてみると、夜食を駆走になり、おばさんと吉治と三人で活動写真見物に行く。なかなか面白かった。

### ▼三月一三日 (晴後雪)

小樽坂下寮に泊まつた私は七時目を覚ます。今日は古平へ帰る日だ。吉治を起し支度する。文治は今日からまた学校行き。試験があつて、授業は二十日まであるとの

こと。八時半、下宿を出る。吉治は風呂敷包みを、私はカバンを持つ。④九時開店をまつて、悦三

や正治、久らにお土産を買う。よい土産になつたが、持つて歩くのはナカナカ骨だ。停車場で姉と会い、十時十分発車す。十一時半外浜丸に乗り込む。十二時半古平着す。ヤマセ風になり時化模様、ハシケに乗り移る時波でナカナカゆるくなつた。熊さんや子供たちは浜に迎えに来てくれた。帰つて小樽での話をしたが、子供らは土産物を出して大喜びだ。夜、米田さんへ行き、実さん壮健でいることを話す。④困にも行く。留守中の事務をとり十一時休む。幸治は高商受験の勉強をしている。

吉治は高商受験の勉強をしている。就寝中から風雪の音が甚だしかつたが、起きて見れば大吹雪、大時化だ。店も茶の間も裏口も雪が吹き込んで真っ白くなつていて。彼岸がくるというのにこの吹雪は寒中の如し。熊さんは今朝家から来るのに、吹き溜まりでようやく来たとのこと。吹雪は朝になつて

る。小学校はこの吹雪で登校困難につき休校になつた。三月中頃と

いうのにこんなことも珍しい。去る九日から十三日まで小樽行き、留守であったので午前中店務をとる。午後一時から役場で鉄道期成会の総会をかねて、種田道議の上京して運動経過報告があるとて行く。大吹雪で少なく、六、七十名の参会者であつた。会計会務報告があり、役員選挙をする。会長は町長、副会長は高野、大澤外、幹事五十名。武田町長初めての出席であつたが、ナカナカ弁舌もよく立派だ。後種田氏の報告があり五時帰る。夜、幸治の卒業祝いでラーメン。翌日、幸治の卒業祝いでもあります。幸治は高商受験の勉強をしている。就寝中から風雪の音が甚だしかつたが、起きて見れば大吹雪、大時化だ。店も茶の間も裏口も雪が吹き込んで真っ白くなつていて。彼岸がくるというのにこの吹雪は寒中の如し。熊さんは今朝家から来るのに、吹き溜まりでようやく来たとのこと。吹雪は朝になつて

### ▼三月一四日 (大吹雪)

祝聖会の例会日、五時二十分に

起床、ソロソロ薄明かりになつた。

早速長靴に外套で出かける。昨夜  
来からの大吹雪まだ止まず、道路

のアチコチに吹き溜まりがある。

寺に着いたのは三番目、しばらく  
あたつて読経す。吹雪で寒いが、  
二月からみれば楽になつた。読経  
の後、例の通り和尚の部屋で漫談  
す。お寺の中庭にも雪がいっぱい  
積もり、和尚さんの部屋も暗く、  
池の方から少しばかり光が入るだ  
けだ。こんなことは今までない、  
以て如何に大雪かがわかる。八時  
帰る。あと四、五日で投網とい  
うのに、この雪を見れば寒中によ  
うだ。熊さんは雪で暗いからと、  
窓の除雪に行く。私は小樽へ行つ  
た話やら、昨日の鉄道期成会の話  
やらしていたら、港町の姉も来る。  
六時から須藤老父の通夜に行く。  
相変わらず吹雪で海は時化ている。  
大に寄り十時帰る。幸治は十七日  
頃小樽へ出ると言つていて、そ  
の頃迄にはよくなるだろう。本支  
店おかさん、本、石河おかさ  
ん、三日前上方見物に行かれたと  
のこと。もう練が沖合まで来て  
いるというのに、急にまた冬に逆  
戻り、春は卒業と入学だが子供の

心まで奪つてしまふようだ。

小樽に出る予定だ。

べなどでは網おろしする。

### ▼三月一六日（吹雪）

### ▼三月一七日（快晴）

### ▼三月一八日（快晴）

十四日來の吹雪と時化はまだ止  
まぬ。今朝の如きまた吹雪つり、  
店も茶の間も雪が入つてゐる。よ  
く荒れることだ。今日午前十時か  
ら役場で、鉄道期成会の幹事会が  
あり、近く衆議院通貨の際の祝賀  
方法など協議し、後常任幹事七名  
を選出した。通過の電報を受けた  
翌日、提灯行列とは旗行列を行う  
ことにした。余市、余別間三十三  
マイル、九百余万円、漁港は百二  
十尺築堤、三十八万円の内二十二  
万円は補助、十万円は町債、五万  
円余は積立金を流用することに決  
したとのこと。新町長の議長ぶり  
はナカナカ鮮やかなもの。終つて  
一時帰る。熊さんは彼岸だんごの  
粉たたきと電話番で忙しいことだ。  
四時頃本から明日の火防総動員  
につき協議するとして電話あり行く。  
いろいろと協議し五時半帰る。店  
務をとり十時頃戸外に出て見る。  
長らくの時化もようやく収まつた  
こと。もう練が沖合まで来て  
いるというのに、急にまた冬に逆  
戻り、春は卒業と入学だが子供の

今日はようやく静かに春らしくな  
った。今朝六時頃、悦三が起きて  
茶の間の金魚鉢を見たら凍つて、  
金魚が口をパクパクさせていると  
て大騒ぎ、台所へ持つて来て湯を  
入れたらようやく元気になり助か  
った。彼岸がきたというのに寒さ  
はナカナカだ。幸治は今日午後に  
行くとて支度す。妻は彼岸の馳走  
を兼ね幸治と文治にやるとてマン  
ジュウをこしらえている。今日は  
火防組合の会合があるが、小樽か  
ら船が来るのでいろいろ用向きが  
あり、午前は欠席した。午後から  
出席して旭部落を廻る。三時頃終  
つて本で休んでいたら、山田伍  
長から辞表が出ているが、組長と  
副組長とで何とか留任を勧告して  
くれとのこと、二人でいろいろ話  
し合いの結果、留任を承知された。  
何役でもナカナカゆるくないもの  
だ。五時に帰る。幸治は三時の船  
で出発したとのこと。願わくは高  
商試験にパスしてくれること。今  
日は吉日とて共、久、キ、



（続く）

ようで、静かな夜になり星がキラ  
キラ輝いてる、明日は良いだろ  
う。幸治は高商受験のため、明日  
日は吉日とて共、久、キ、

# 積丹半島横断道路

4

## 神恵内道路の建設

### ◆二級国道決定まで

の経過

～続～

国道の総延長が一万キロメートルに抑えられること、全国の都府県が争つて国道指定の請願や陳情が続けられている中で、この古平—神恵内線は新しい道路法に合致せず、基準に達しないものとしてついに認められなかつた。

しかし、この全国的な国道の誘致合戦ともいえる運動の中で、建設大臣佐藤栄作の裁断と、自民党幹事長増田甲子七の斡旋により、神恵内村当丸開拓地と古平町六志内開拓地を結んで、積丹半島横断国道路線とすることに決着がついた。

ただしこれには、神恵内村から余別村を経て古平町に至る半島を廻る道路は、国費を以て維持管理

する開発道路に指定するという条件をつけ、最終的な決定をみることになった。

積丹半島を廻る国道認定の実現をみなかつたことは、實に残念なことであるとしながらも、「道路法の規定をこえて、積丹半島住民に配慮をされた、当局の法の運用と執行に深く感謝する」ということを、率先してこの事業の折衝に当つた、古平町伊藤町長は開通式の謝辞で述べている。

### ◆工事概要

総延長	一六、八七九 km
事業費	九三二、〇〇〇千円
土工量	切土 九五四、〇〇〇立方m 盛土 四二四、〇〇〇立方m

※ 数字としては実感がわきませんが、記録として記しておきます。  
総延長については古平—余市間の距離(約一三 km)の約半分です。

← 六志内トンネルの完成

開通に至るまでは、地元住民の並々ならぬ運動があつた。古平町では道の無い所に先ず橋を架け、これを逆手にとつて、ルート決定の有効な武器にしたというが、関係者の間にエピソードとして残されている。

たのである。

橋 梁 六橋 三三九 m  
擁壁 四八三 m  
使用セメント 一、四三一 t  
砂利量 四四、一〇〇立方m  
筋 三四一 t  
就労人員 (延) 一二七、〇〇〇人

(小樽開発建設部 工事概要書)



→ 道路新設の難工事 (場所不明)



この横断道路は多くの困難をのり越えて開通したもの、険しい地形と、悪い地質の条件から土砂の崩落や落石事故に加えて、地すべりなどが続発し、さらに積雪が四メートルを超えるため、大小の雪崩が発生することから一月初旬から五月上旬頃まで、冬季間は全面交通止めを余儀なくされた。

昭和五〇年代に入り、本格的な改良工事に着手し、昭和五七年には一般道古平・神恵内線となつたが、引き続いて開発道路として北海道開発局が工事を実施し、昭和六〇年に完成をみたのである。

### ♣両町村長 インタビューから

祝賀会の後、古平町伊藤町長と神恵内村北井村長は、北海タイムス社記者のインタビューに次のように応えている。

伊藤町長＝長い歳月でしたのが完成してホッとしています。積丹半島は今まで袋小路だったため、観光客もコースをまた戻るという不都合もありましたが、この道路

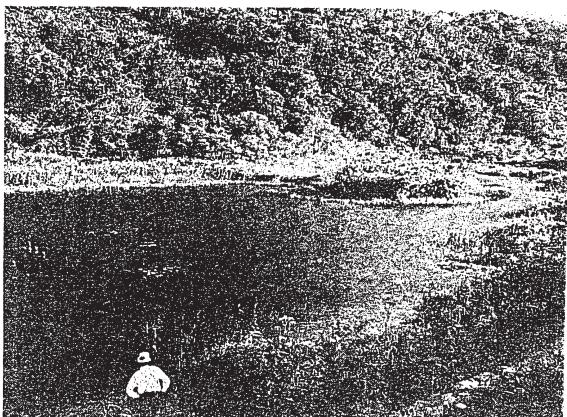


北井村長＝札幌方面への海産物、農産物の輸送はすべて岩内廻りでしたが、新道路の完成で時間も三〇分以上短縮されました。これで後進地といわれていた後志経済圏も大きく飛躍するでしょう。この道路から見る景色はすばらしいので、これからは展望台の建設なども考え、観光道路としても活用していきたい。

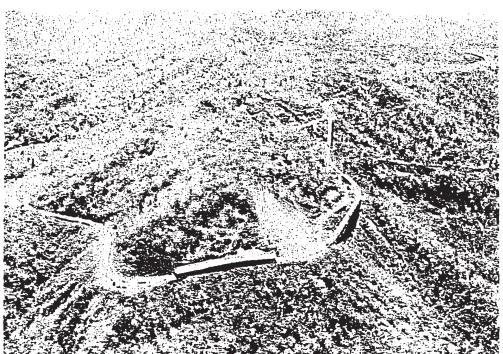
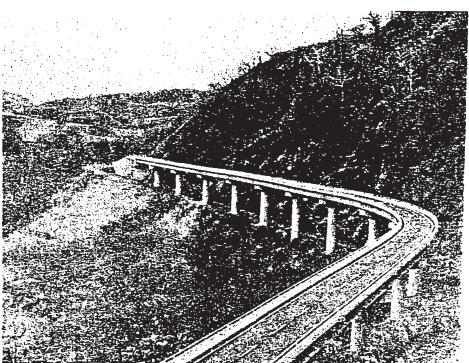
→ 当丸峠 眺望が開け、一大パノラマが展開する名勝の地

← 隠れた名勝地としての御内沼

この沼は山が大きな地滑りを起し、その滑り落ちた山の壁(ひだ)に水がたまつて出来たものと考えられている。そのため山の背後には急な斜面が屏風のようになります。沼の斜面下には平坦地や、地滑りによって出来た幾つもの小山が続いている。周囲はスマガリダケに覆われ、ナナカマドに混じってタケカンバの林がある。豪雪地帯であるために木の地表に近い部分が大きく曲がっている。(現在は沼の傍に展望台がある)



← 改良工事によりて、道道町線として現在は通常の交通が確保され、安全と快適なドライブコースでもある。



# 5 町内の学校探訪 5

16

# ◇教科と特別教育規定

## （続く）

それで今回は従前の規定の外、さらに小学校の教科目の教授の程度や、教授時数に関する規定を出した。当事者はよくその制定の趣旨を理解し、地方の実情に適応するように留意しなければならない。左にこの規定を制定した趣旨と、実施する上で特に注意要する事項の大要を示す。(以下省略)とあるが、時勢の推移と地方の実情をふまえ、校舎の増築をしたのを機会に、一般小学校令施行規則を採用し、教科目と教授時数を次のように定めた。

## ◇各学校の就学状況

各学校の就学状況		(大正六年)		児童数		前年との増減	
学年	級	尋常科	高等科	尋常科	高等科	尋常科	高等科
古平尋常高等学校	一三	三	三	二	二	一	一
同鴨居木特別教授所	一二	九一	九一	六三	一六三	五九	一五九
沖尋常小学校	一〇	五五	六二	一〇三	四五	八二	一四五
群来尋常小学校	七〇	六六	七六	六〇	八八	▲九	八二
新地分校	一	—	—	—	—	—	—
同鴨居木特別教授所	一	—	—	—	—	—	—
沖尋常小学校	一	—	—	—	—	—	—
群来尋常小学校	一	—	—	—	—	—	—
合計	一	—	—	—	—	—	—

◇各学校の就学状況

尋常科五、六年男子の実業  
三、時間数の増加したのは、  
尋常科一、二学年の図画  
尋常科五、六年の算術  
高等科一、二学年の英語、商業  
四、時間数の減じたのは、  
尋常科一、二学年の国語  
尋常科五、六年の国語、理科  
高等科一、二学年の国語、農業  
高等科一、二学年女子の裁縫

大正七年 市町村義務教育費国庫負担法が制定され公布された。この法律によつて市町村立尋常小学校の正教員、準教員の俸給の一部を国庫が負担することになつた。この国庫からの配分は、市町村立尋常小学校の教員数と就学児童数によつて比例配分されるものであつた。この年の義務教育費の国庫負担金の総額は約一千万円であつたが、大正一二年には四千万円になり、大正一五年には七千万円に増額された。

◇義務教育費

國庫負擔法公布

## 一、新たに加えた科目は、

この法律による大正七年の古平町の義務教育費の下渡金は一、三七五円六三銭であつたが、これは町が義務教育費として支出する金額の一割七分余りに過ぎなかつた。大正一二年には五、五四三円九銭に増額され、教員俸給額のみても国庫負担金は一割七分余りに増えた。

◇学校関係行事

大正二三年一月二六日、皇太子殿下が成婚の日、古平町ではその奉祝式を古平尋常高等小学校で行つた。式の終了後午前一〇時から、小学校児童らが旗行列を行い、これに共催の町役場・在郷軍人会・古平町分会・古平町内の青年団、古平教育会などの団体が参加した。

この年三月、北海道厅から加瀬主事、後志支厅から太田視学が特派され、新地町古盛座で、当時の国策に沿つて国民精神作興講演会と、まだ珍しかった教育活動写真会（映画会）を開催した。

また八月には、東洋大学教授高島平三郎の講演会を開催するなど、学校関係の講演会や夜学会行事が古平教育会が主催してしばしば行

われた。古平教育会に対しては、町費から七〇円から九〇円程度が補助されていた。



▽外はすつかり春めいて来ました。が、ようやく一月号の発行にござつたしました。愛読されている方からは、「次ぎ出ましたか?」と聞かれますが、「あ、もう少しで…」と言ひ詫ばかりしています。

▽現在は毎月四五〇部印刷しておりますが、町内の行事などがあるときは、それによつて多少多く印刷します。「どこへ行つたらありますか?」と聞かれますが、役場・古平郵便局・浜町郵便局・福祉センター・あるびら温泉へ各五〇部、元気プラザ・海洋センター各一〇部、文化会館には残部が無くなるまで補充して、事務所前の棚に置いています。町外の発送は二〇部くらいですが、田岸倉治さんは毎月自費で、三五部を町外の知己の方に送つてくれださつております。二手数と出費をおかけしておりますがありがとうございます。

▽役場の細川係長がホームページで公開しておりますので、全国のどこかで、誰かがご覧になつていて下さい。

▽先に十一月号を合併号としましたので、毎月寄稿してくださる大澤さんからの原稿が一ヶ月遅れてしまいました。それで今月号に大澤

さんの一二編を掲載しました。待たれてるファンの方も居られるようですが、時季がずれましたが、「覗くだけは幸いです。

△お尋ねしたいこと—— 沢江町海岸のモツコ岩傍 もと△（屋号・ウロコ）仲谷ニシン漁場跡と題ますが、ニシンの汲み船が岸に近づき易いように、岸近くの海底の岩盤を切り割りにした水路が残っています。（現在でも近くの石垣の上からほつきり見えます）このような水路は各地にもあるとみて、以前ある本でそうゆう場所の名前を見ましたのが失念してしまいました。確か「○道」と書いてあつたように思います。「どんなものにでも必ず名前というものはある」と言われていますが、その名前を見たときにも「なるほど」と納得しました。北海道文書館 道立図書館にも問い合わせしましたが解りませんでした。

「むかし、こんな名前だった?」

と思い出された方はお知らせください。お願いをいたします。

△昔なら、今頃はニシンの話しが沸きかえっているであろう浜も、今はのんびりした風景の中で、刺繍に掛かった僅かなニシンだけしか見られません。さびしい春です。

『古平町史』第一巻の「第二章 牧畜業」の項に「官馬の変遷」と題し、

— 安政五年（一八五八）、一般住民の馬を飼うことを従来どおり禁止しており、願田により官馬を貸付けていた。文久元年（一八六〇）から場所請負人、出稼人に馬を所有することが許された。

— 明治十八年大股鉱山の発見から、鉱石、資材運搬のため駄馬が使用され、馬の飼育が急激に増加した。

— 明治二十二年頃、新地町金

比羅神社の祭礼に、草競馬が行われた。神社前から新地の道路を浜まで走らせた。町の人は軒下で見物し、発走から決勝までは、中央の屋根の上でなければ見られなかつた。

— 明治三十二年（一八九九）、浜町の馬數は四十八頭になり、運搬、農耕に使役し、四季貯蓄いであつた。——

と記述されている。

当時、なぜ「一般住民」は馬を飼うことを禁止されていたのだろう

うか。不思議に思つ。草競馬に関しては、娯楽の少ない時代背景を考えると、見物人達の荒い息遣いと喚声が聞こえてくるような気がする。

以前 村井芳男先生から送つていただいた「ふるさとのアルバム」第十集（平成十八年十月十日発行）の表紙に、すけそ漁でこうたがえす浜で、魚の籠を馬籠で運搬する馬の写真が載つていた。

赤れられない一つの光景がある。小学校に入る前後の頃のことだつたと思う。その時飼われていた馬は、肋骨が浮き出でていた。いつもキツツ（馬のかいば桶）に首を入れ、人参や燕麦や刻んだ糞などをカリカリとよい音をたてておいしそうに食べていたが、しかし太らなかつた。労働が厳しすぎたのかもしれない。瘦せていると見映えがしない。どことなく元気がな

いだいた。次に、まだ十五、六歳だった三番目の兄が手綱を持った途端、馬は動かなくなつた。

若い兄は必死に手綱を引き、馬の尻を叩く。馬は前足を蹴り上げて立ち上がる。兄は泣きそうになりながら、「この野郎、この野郎」と言つて馬を叩く。馬は増え暴れる。夜、父と兄達は、「あの博労に騙された。ジャミ馬（暴れて使いものにならない馬）だつたんだ。畜生」と切歎扼腕した。

二歳になつて馬耕の訓練をする時、飼い主に叩かれたりして相当苛められ、すつかり根性が悪くなつたのだろう、ということであつた。馬も飼い方で変るのである。

ジャミ馬と格闘した兄は、今月の初め、八十五歳の生涯を閉じた。

合掌。

# 新年に寄せて

大澤文子

今年は十一支の第二、辰年である。昔の時刻の名でも知られているが、現在の午前一時頃から三時頃の間の「うしみつどき」と言つたのである。…と、広辞苑を調べてみたがそのように記されていた。

「新年」という節目にあたり改めて種々の事柄に心を寄せ、速やかに対処していかなければならぬ日々でもあらうが…。

暮から正月にかけて海外旅行の人々…、または親孝行と称し故郷で過ごす人々のなんと多いこと。それぞれの事柄が賑やかに報じられ、そろそろ終末を迎える頃には、昔から伝わる新春行事の七草粥の日がやつてくる。

七草粥を食べると「一年中病気もせず元氣でいられるよ」と言う謂れにもとづき、必ずと言つていいほど、各家庭の正月行事の一つにな

つてるのであらう。

だが伝統的な春の七草とは…、「せり、なずな、「きょう、は、べら、ほとけのざ、すずな、すずしろ」など、床しいけれど、現代人は馴染みのうすい名前もまじるのである。

代りに現代の新七草といえ、ミツバ、シュンギク、レタス、ホウレン草、キャベツ、セロリー、ネギ等々であろう。

七草も変わりつつある現代であるが、正月の風俗もまた、変わりつゝあるのかどうか、一概には言えないが生活の変容がさまざまな影を落しているのは確かであろう。

七草も成人の日…と、またたく間に過ぎ行く日々、なんとなくペ

瞬間！見事な空の状景に女性客達も一齊に「わアす」「！」驚きの声をあげる。「ああきついといい事あるよ！今年は！」とひとりが叫んだ。「幸せギュッとしまった一年にしたいよー！」とさけぶ。正月早々若い女性達に明まれ楽しいひとときだつたなア…、この夜また日記の一ページに記す。

新年早々いつも思つて…だが、まあ私も今年はほじほどの期待をかけた夢をもち、この丑年を樂しく「夢見る夢女」として前進してゆきたいものと、この夜日記に記す。

先日、七草も過ぎた頃、珍しく美容院にでも…と思い午後、凍つく道に足をとられぬよう、一步一歩気をつけながら出かけた。

一、三人の女性達と順番を待ちつづ、快い暖かさにぶと窓越しに見上げた昼の空、なんと…東の空一面、青一色の色紙を張りつけた如く、片の雲のかけらさえない。

「わあ！」思わず声をあげた

わが部屋の窓際には、鉢の紅梅白梅の蕾がふくらみかけ、私の行動を見守る…がに揺れる。

瞬間！見事な空の状景に女性客達

も一齊に「わアす」「！」驚きの声をあげる。「ああきついといい事あるよ！今年は！」とひとりが叫んだ。

若い女性達は一齊に手をあげ

「幸せギュッとしまった一年にした

# 雪待つ心

大澤文子



節分・立春・と日めぐりを操るのも早い。今年は一月早々寒気が流れ、こんで雪の降る厳しい日が続くと…報しられた。

予想どおり北には連日の猛吹雪、吹きつけられた雪は玄関のドアを開けるたびに流れこみ、雪の始末に休む間もない。

猛り狂う吹雪はベランダの窓々をたたきつけ、外部からは遮断され一寸先も見えない日々、「日が育ち寒さも育つ」の諺があるというが…、一月に入るとやや日脚も伸びるが寒さのほうは威力を増す。

「厳寒本番はこれから…」と日記に記す。

雪国に暮らしたことのない人々には、空を埋めつくすほどに舞い落ちた。

丘の上では風のいたづらか、耳もとで誰かがささやく音がする。時折り小さな雪のかたまりが生きもの如く、パラパラ落ちる。雪ぐにはまだ寒い。だが本番は遠くない。

ブルドーザーが激しくうなり音をたてて通り過ぎてゆく。

て、家も道路も全て白一色に変える雪の威力は分からぬであろう。いつの日か、お天気博士が「天と地の間に充満して次から次へと落ちてくる無数の雪片には、肅々とし、あらゆるものを作倒す不気味な力が感じられる…」と、ある新聞に述べられていたが、今更ながら合点がゆく。

北ぐにの人々にとって、この冬の唯一の慰みは梅の花便りと言えそう。時折りテレビに映る綻び初めた梅の花びらを眺め、心楽しく春待つこの頃である。

連日の吹雪も止み、しばらくぶりに枯山の間をあかく染めて昇る陽を見た。その美しさは、まるで幻想的な世界に身をおく思いさえしめた。

「時の刻みは三重である。未來はたらいくつ近づき、現在は矢のよう

に早く飛び、過去は永久に静かに立っている…」と…。ふと、現在改めて「なるほど…」と納得がいったのである。

先日、仲のよい友達「三人と、『これから家庭の健康』についていろいろ話し合つたが…」

先ず「食生活の健康管理」「睡眠」「仲のよいとともにのおしゃべり…」と「…よね」と、よく歌友とはなしていたあの頃。

そう言えば「高価な鮑もこの頃みる」ともないよね」と彼女は言う。

女性達はすぐ懐かしい食(物)のことを思い、彼女達と顔を見合せふくみ笑いする…とも多々ある。

今年も平和でありますように…と、誰しも祈る日々であろうが、

解決策も、おしゃべりの中でいくらか解決してゆきたいものと思つ。

いつか「故中村編集長」にからかわれた事をよと思ひだした。

「大澤編集員は辰年生まれだよな

ア、辰年の辰は振動の右邊にある文字、新しいものが生れ出す躍動の

が言つていたよ…」と、笑顔で言わされた…とを…忘れはしない。

# 悠

雜詠 「二月号」

主宰 水見壽男

古平俳句会

虫鳴ける一つの声の星明り

越野清治

知床の五湖を染めあげ秋日落つ  
秋声や還らぬ島を波に見る

オホーツクに忽焉と海霧襖立つ

鹿の声遠く峙つ神の山

山口悦子

【句評】

書に倦みて窓を開くるや夏の蝶  
湯上りに団扇優しき風送る  
冷奴父の好みし酒の友  
三日月の研ぎ澄まされし光かな  
古里に辿りつきたる鮭の群  
母の忌の供花竜胆に娘の思ひ  
晴天や蜻蛉つながり水を打つ  
秋蝶の羽小刻みにふるひ落つ  
風九月日々に色増す遠き山  
コスモスの赤白ピンク無人駅

高橋重子

コスモスに静かな暮色深まれり

やかなせせらぎの上ログハウス

無月なる漁火遠くありにけり  
借景を庭に取り入れもはや秋

空高く茜に染まる鰯雲

青白く水面に揺れる今日の月

大雪の湖沼に映える紅葉かな

潮風の沖より薰る灘の秋

秋雲の大航海を眩しめり

竿になり鉤にもなりつ飛べる雁

青杉のなだりに沈む虫の声

曖昧に暮れゆく岬霧襖

波音も波の白さも霧の中

霧湧けば神威岬の灯の寂し

積まれたる網に絡まる鰯雲

鰯雲海見て海と生きし町

名月の名残に搖らぐ岬の波

今日の月乗せて出船の音高し

月影をなほも深める湾明り

大いなる海になだるる虫時雨

一湾にまかり出でたる月とこそ

句評

外山俊久

堀典子

渡辺嘉之

句評  
室谷弘子

句評

悲

津

〔四二〕

古平俳句会

—月号—

厳寒に母の残せし綿半纏 外山俊久

雪山で真つ赤な頬つペ櫻遊び

木枯しや音のとび込む日本海 堀 典子

向つ峰の木濡れしづかに時雨かな

晩学の日々は短かき木の葉散る 渡辺嘉之

老木に鞭打つ風や木の葉散る

時化つづく湾の落葉を掃きにけり 室谷弘子

読めぬ風なほも落葉の嵩なせる

前浜は冬濤ばかり騒しく 仲谷比呂吉

山深く黄色に燃ゆるひと所

軽井沢よそと違つた秋なりし 越野清治

軽井沢空に抜けるか天高し

客足の途切れし出湯茸飯 山口悦子

秋霖や浮世離れの愚痴を聴く

冬めくや木々の囮ひも社殿庭 越野敏雄

木の葉散る湖面彩る裏面

裾引くや女ながらに秋支度 大和田絵伊

湯に浸る雑木紅葉を称へつゝ

山裾の石仏たちと石蕗の花 高橋重子

帰り花悲しきことも佳き事も





## 古平町岬短歌会

沢江より積丹岳の冬姿飽かづ眺むるこゝが一番

泉 清三

東京に住めるいとしき幼な孫年賀状をみつめ思ひを馳せり

金子寿子

今朝の空青く広こり澄み渡る真白き雪は眩しく光れり

坂本信子

年の夜をうからら地図に額寄せて京都めぐりの旅話しあふ

鈴木時子

久々に作りしタケの鮭汁は味よきことよゆつくりすする

玉谷美都子

寄せ植えの赤白エンジのシクラメン孫らと囲み三色(みいろ)を楽しむ

寺田カツ子

さくさくと凍るる雪の足音は訪ひ来る人らしチャイムの鳴りぬ

仲谷喜美能

寒き中ひたすら春を待つ心遠き日の青春(はる)の心にも似て

堀典子

闇空の炎となりて秋祭

越野清治

綿虫の乱舞にしてふれ合はず

齐藤波留

川の面も曇天なりや秋深し

山口悦子

ひよどりの目にせば既に山河越え

越野敏雄

コスモスは芯の強さを秘めて咲く

大和田絵伊

一日の始まる街の色も秋

高橋重子

栗拾ひ手と手となぎ童歌

外山俊久

秋高し残照の岬美しき

堀典子

短冊に落款を押し初紅葉

渡辺嘉之

秋の日や浮き立つてゐる岬の波

室谷弘子

河原の野菊に風のほぐれをり

仲谷比呂古



## 古平俳句会

闇空の炎となりて秋祭

越野清治

綿虫の乱舞にしてふれ合はず

齐藤波留

川の面も曇天なりや秋深し

山口悦子

ひよどりの目にせば既に山河越え

越野敏雄

コスモスは芯の強さを秘めて咲く

大和田絵伊

一日の始まる街の色も秋

高橋重子

栗拾ひ手と手となぎ童歌

外山俊久

秋高し残照の岬美しき

堀典子

短冊に落款を押し初紅葉

渡辺嘉之

秋の日や浮き立つてゐる岬の波

室谷弘子

河原の野菊に風のほぐれをり

仲谷比呂古

# 古平町史年表

## 昭和40年 (1965) ~ 続き

- 12/13: 古平町でブルドーザーD-60型を購入、新型に更新し入魂式を行う
- 12/30: 古平漁業協同組合が貯油タンクを新設すると共に、上屋新築工事の修祓式を行う
- 12/-: 中央バス積丹線が、余市駅前に停留所を設置する
- 12/-: 町内の剣道愛好者が集まり古平剣道連盟を結成する。会長に高野常雄が選任される

## 昭和41年 (1966)

- 5/1: 古平町長選挙で、伊藤由松が無投票で五選する
- 6/3: 有志による五選の『伊藤町長を励ます会』が開かれる
- 6/16: 和牛の飼育が盛んになり、古平町が主催する第1回家畜共進会が行われる
- 6/19: 古平町で、高浜虚子来道記念第8回全道木トトギス大会が開かれる
- 7/5: 琵琶湖産アユの稚魚を初めて古平川に放流する
- 7/25: 古平高等学校が水産実習として行っていたくん製工場と車庫が完成する
- 8/15: ソ連からの『スケソウ輸入反対漁民大会』を古平小学校で開催す
- 8/21: 吉田一穂「鎮魂歌」詩碑を琴平神社忠魂碑前に建立し、一穂を迎えて除幕式を行う。除幕式では小樽アポロ男声合唱団による鎮魂歌の合唱がテープにより披露される
- 9/3: 札幌で開催された漁民大会の一一行1300名余りが古平漁港の視察に来町する
- 9/20: 沖村(現在の沖町)治水砂防ダム竣工式、並びに祝賀会が行われる
- 9/31: 古平漁協組合荷捌所の竣工式が行われる

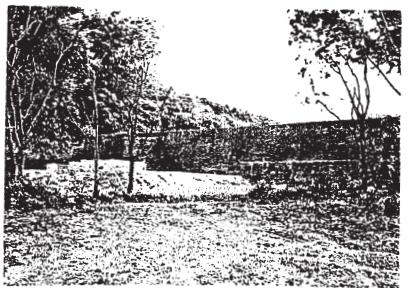


↑ 伊藤町長の五選を祝う会

→ 金道木トトギス大会で来町の  
稻畠広太郎現木トトギス編集長



↑ 吉田一穂『鎮魂歌碑』



↑ 旧沖村川上流の沖村砂防ダム